

## 「塩気をなくした塩」

2015年10月03日

ルカによる福音書 14 章 34 節～35 節。「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。」

塩は人間の体になくしてはならない養分である。塩が欠けると、体がだるく、気力をなくしてしまう。そして、塩は食べ物の味を引き立てる。甘さを引き出すためにお汁粉にも塩を入れる。また、腐敗を防ぐ大事な調味料である。保存食品の漬物には、塩は必須である。塩の大事さは誰もが知っている。

エルサレムの南にある「死海」は塩分の濃い湖で、カナヅチでも体が浮いて、溺れることはない。かつては海であったが、水が蒸発し、塩分の濃い湖になったのであろう。周りは、岩塩の岩山が広がっている。創世記に、アブラハムの甥ロトの妻がソドムから逃げる時、後ろを振り向いてはならないと言われたにもかかわらず、振り向いたため、塩の柱にされたと書かれている。塩の柱になった妻の似姿が観光名所になっている。

主イエスは、塩は良いものであるが、塩気がなくなると役に立たなくなる、畑の肥料にもならず、外に投げ捨てられるだけであると言われる。塩に塩気がなくなることはない。塩はあくまで塩である。純度の低い岩塩はゴミとチリが混ざっており、塩が溶けて流れ出ると、ゴミとチリだけが残り、何の役にも立たない。主イエスは、塩気をなくした塩でなく、役立つ良い塩でありなさい、しかも「耳のある者は聞きなさい」と特に傾聴するように語っている。

マルコ福音書 9 章 49～50 節の並行記事では「人は皆、火で塩味を付けられる。塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい」と書かれている。人は皆、火で塩味が付けられている。塩は良いもので、自身の内に塩を持ち、その塩によって平和に過ごしなさいと勧めている。塩は互いを受け入れ合う和らぎの働きをするものと理解されている。

マタイ福音書 5 章 13 節の並行記事では「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである」と書かれている。主イエスの祝福を受けたあなた方は「地の塩」である。社会に味付けし、腐敗を防ぐ働きをする者とされている。だが、塩に塩気がなくなると、味付けができなくなり、役立たずとして、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。

コロサイ書 4 章 6 節に「いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」と書かれている。塩の効いた言葉は相手に快い言葉として聞かれるという。

塩は相手の味を引き出して、互いに和らぎ、平和を実現するもの、また、聞き易い言葉を生み出す大切なものとして捉えられている。塩だけを口にはできない。適量の塩を素材に対して有効に使うと、素晴らしい効用がある。主イエスの言葉を聞き、従う者はいつの時代でも少数ではないか。主イエスは既に「あなたがたは地の塩であると」言っている。塩気をなくしたゴミとチリだけになってしまわないで、世の中に役立つ「地の塩」として、用いられたいものである。